

大学を拠点とする総合型地域スポーツクラブの 会員に関する一考察

—いきいき大東スポーツクラブのケーススタディー—

國本 明德*・正見 こずえ**
松本 耕二***・北村 尚浩****

Study of University-based Community Sports Club Members

—A Case Study of the “Iki-iki Daito Sports Club”—

KUNIMOTO Akinori*

MASAMI Kozue**

MATSUMOTO Koji***

KITAMURA Takahiro****

Abstract

This paper investigates the current understanding of the management of a university-based community sports club by examining the “Iki-iki Daito Sports Club.” A survey was conducted to reveal the club members’ characteristics, organizational commitment, and the facts behind club selection methods. The survey results revealed the following:

- 1) The club members had different characteristics based on gender. Young males, mainly university students, joined clubs for fun and enjoyment purposes, while middle-aged women, primarily housewives, joined clubs to focus on their health.
- 2) The satisfaction levels and activity results for this particular club as well as the members’ level of organizational commitment were relatively high. However, organizational commitment levels and activity results differed depending on

平成23年12月26日 原稿受理

*大阪産業大学 人間環境学部スポーツ健康学科講師

**大阪産業大学 人間環境学部スポーツ健康学科助手

***広島経済大学 経済学部スポーツ経営学科准教授

****鹿屋体育大学 スポーツ人文・応用社会科学系准教授

member characteristics.

- 3) The factor stipulating the level of organizational commitment was the level of satisfaction with the club. Furthermore, the level of future participation in club activities was stipulated by the level of organizational commitment.
- 4) When this particular club was selected, emphasis was placed either on its university location or on the programs and factors made available through university interaction.
- 5) The club was involved in managing three tasks. The first task was conducting publicity activities for the health program using university resources. The second was the effective use of university facilities and scheduling of programs according to the members' requests. The third was the creation of a mechanism to deepen exchanges between club members.

キーワード：大学拠点，総合型クラブ，会員特性，組織コミットメント，クラブ選定要因

1. はじめに

総合型地域スポーツクラブ（以下、「総合型クラブ」）は、誰もが生涯にわたってスポーツを楽しむことができる“場”と自立・自律した経営システムを創り出す地域の組織として、文部省（現文部科学省）が1995年にその育成事業をスタートさせたものである。2004年からは（財）日本体育協会が総合型クラブ育成推進事業を推進し、現在、この総合型クラブは全国に2,664クラブが設立されており（文部科学省，2010），様々な設立・運営形態がみられる。なかでも大学が拠点・連携している総合型クラブは40クラブで、それに係わる大学は38校を数える（文部科学省生涯スポーツ課，2009年3月現在）。

総合型クラブの多くが課題として挙げる、ヒト（指導者やスタッフ）、モノ（体育館などの施設）、情報（専門的知識やノウハウ、プログラム）等の社会的資源が大学にはある。地域住民の立場ではシンボリックな地域財であり、大学との連携やその資源の活用はヒトやプログラムの質、経済的価値、アクセス面、安心感など様々なメリットを享受できる。他方、大学においても18歳以下の人口減少による入学生確保の戦略、また学校教育法の改正（2003）による地域貢献が求められている実情からすれば、総合型クラブとの連携を推し進める利点は多々ある。学生が主体的に総合型クラブの運営支援へ取り組む営みが現代GP（文部科学省）にも採用され、大学（学生）と地域（住民）の双方向に交流し合う新たなスポーツ教育活動としても注目されている（行實，2009）。

これまで総合型クラブを対象とした調査・研究は数多くあり、なかでも大学を拠点とした総合型クラブに着目した報告をみても、設立や提案（中村，2001；永谷ら，2005；竹田，

2009), 組織づくりやクラブのあり方(梅垣・永谷, 2005; 堺ら, 2006; 行實・満園, 2007), 地域住民へのニーズ(遠藤, 2000; 永谷・築瀬, 2006; 永谷・上田, 2007; 永谷, 2010), あるいはプログラムへの取り組み(高橋ら, 2009)や開発(原田ら, 2007)など比較的多い。大学の施設を利用した総合型クラブの設立にあたっては, まずは地域住民に総合型クラブの存在意義や必要性, そして民間スポーツクラブとの差別化を明確にするための広報が重要である一方, 大学がもつ体育館やグラウンドなどのスポーツ施設等のハードウェアが利用できることは魅力とされる。しかしながら, 本来の教育活動や学生らのクラブ活動などとの共存という課題が残されていることも指摘されている。

また総合型クラブの課題を抽出している研究(松永, 2003; 伊藤ら, 2001; 松永, 2005)もある。特にマネジメントの課題としては, 身の丈にあった運営, つまり, 会費・事業収入・寄付や補助の三本柱による財政基盤の確立が必要であることが指摘されている。ヒューマンウェアにおいても, 総合型クラブの核となる人材の発掘や確保とその育成が重要な鍵を握っているとしている。さらに会員獲得のためには地域のアイデンティティを加味したうえで, 敷居が低く身近で親しみやすいクラブづくりが重要であることを明らかにしている。

大学と連携する総合型クラブの成果報告(行實, 2009)では, 連携する大学側の関与の在り方やその度合いがクラブ運営に影響を与えていることを明らかにしているほか, 大学を核とした総合型クラブの創設・育成・運営の総合的な評価としては, 短期的にはメリットとデメリットを比較することはできないとする報告(馬場ら, 2008)もある。今後, 総合型クラブを介した地域との連携や学生のスポーツ教育活動, さらに大学による地域貢献を検証するには, 大学を拠点とした, あるいは連携して運営する総合型クラブを対象とした実証的研究の蓄積が望まれる。

一方, 総合型クラブ会員のクラブに対するコミットメントに焦点をあてた研究は未だもって少ない。富山(2003)は会員が持つクラブへのコミットメントの総和として「帰属意識」が有効なスケールであるとし, その帰属意識は多様な側面から構成されていることを示している他, 松本・北村(2004)は, クラブ会員のクラブ満足度やクラブ活動の成果が高いほど組織コミットメントが高く, またこの組織コミットメントが高いことに加え, クラブ活動への成果を実感している会員ほどクラブへの継続意欲が高いことを明らかにしている研究がみられる程度である。また行實(2009)はクラブ会員のスポーツライフと地域社会に対するコミットメントとの関係性について, 運動・スポーツとの関わりが多くなるほどコミットメントが高くなることを示唆しているものの, 調査対象がクラブ会員の保護者となっている他, コミットしている対象もクラブだけではなく地域社会とその範囲が

広く曖昧なものとなっている。このようなことから、クラブが地域社会や住民と双方向に交流を図っていくためには、クラブでの活動成果やコミットメントについても掌握していくことが、クラブ運営における重要な指標の一つと成り得よう。つまり、大学にとってもより積極的にクラブ運営の支援に関わっていくうえにおいて、貴重な資料となるのである。

このように、近年においては総合型クラブへの関心が高まるなか、その設置率も増加しているものの、地域住民の総合型クラブに対する認知度や理解度が低いという問題、会員募集などの運営・経営に関するマネジメントの問題が多々生じるようになり、総合型クラブの行き詰まりや破綻も見受けられるようになってきている。このことから、民間のスポーツクラブだけではなく、今日では総合型クラブにおいてもプログラムやイベントの種類および完成度などの「ソフトウェア」、施設や設備に留まらずアクセスまでを考慮した「ハードウェア」、そして人的資源である「ヒューマンウェア」に会員や財源の確保などを加えた総合的なマネジメントが必要不可欠となってきている。

そこで本研究では大学を拠点とした総合型クラブに着目し、会員の特性やクラブへのコミットメント、クラブの選定要因について明らかにすることにより、今後のクラブ運営における基礎資料を得ることを目的とした。

2. 研究方法

1) 調査概要

本研究では、大学を拠点とした総合型クラブである「いきいき大東スポーツクラブ」の会員を対象とした質問紙調査を実施することにした。このいきいき大東スポーツクラブは、大東市、地域住民、大阪産業大学の官民学が協働し、「いつまでも楽しくスポーツを続けられる機会を提供し、地域住民の健康と地域社会の発展に貢献する」ことを理念に、約1年間の準備期間を経て、大阪産業大学の地域連携センターであるWellness2008を拠点として2009年2月に設立されたクラブである。また大東市として初めての総合型クラブでもある。

調査時期は2010年7月～9月に、いきいき大東スポーツクラブの成人会員（大学生を含む）を対象に悉皆調査を試みた。調査はクラブ側の全面的な協力の承諾を得たうえで、会員が参加したプログラムの終了時に調査員が調査協力を依頼してその場で回答、もしくはクラブのフロントで帰宅時に配布して後日回収とした集団面接法ならびに留置法による質問紙調査を実施した。調査用紙の配布数は151部、有効回答数は115（有効回答率：76.2%）であった。

大学を拠点とする総合型地域スポーツクラブの会員に関する一考察（國本・正見・松本・北村）

質問紙による調査内容は、先行研究から、①個人的属性、②活動志向、③クラブ満足度、④活動成果、⑤組織コミットメント（OCQ）、⑥クラブ選定の6項目を中心に構成した。

2) 分析方法

まず、サンプル全体の傾向を把握するために単純集計を行った。次いで、クラブ満足度と活動成果（松本・北村，2004を援用）については5段階評価尺度を用い、満足度や成果の高い順にそれぞれ5から1の得点を与えて数量化し、性別や職種による違いをみるためにt検定およびF検定を行った。

組織コミットメントに関する項目は、松本・北村（2004）が行ったMowday et al. (1982)のOrganizational Commitment Questionnaire（以下、「OCQ」）の邦訳文を用いた。5段階のリッカートタイプ尺度で測定されたOCQ（15項目）は、“非常にあてはまる”から“まったくあてはまらない”までの5段階評定順にそれぞれ5から1の得点を与えて数量化した。ただし、クラブに対する否定的態度を表す6項目については得点を逆転させて数量化した。

また組織コミットメント、ならびに継続意欲を規定する要因を明らかにするために、個人的属性（性別、年齢、婚姻歴、過去のスポーツ経験）の4項目、クラブ活動状況（プログラム満足度、活動成果）の2項目、クラブ活動志向（交流、健康、楽しさ、技術）の4項目の計10項目を説明変数、OCQ（15項目）と継続意欲を被説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を施した。

クラブ選定項目においては先行研究を踏まえた一般的な項目に、当該クラブの特長や独自のプログラムなどの項目を加えた22項目を設定した。“非常に重要である”から“まったく重要でない”までの4段階評定順にそれぞれ4から1の得点を与えて数量化し、これらの変数を総合的に取扱い、かつまとめたものに順位付けをするために主成分分析を施した。

3. 結果および考察

1) サンプルの属性

本研究におけるサンプルの属性は表1のとおりである。女性で既婚者、かつ専業主婦で50歳以上の者や大学生が多かったことから、本クラブの会員は男子大学生（27%）、中高年の専業主婦（38%）、それ以外（35%）の3群に分類できたことが、その特性としてあげられよう。またクラブへの入会目的は「健康・体力づくり（57.9%）」が最も多く、次いで「運動不足の解消（26.3%）」となっており、個人の“健康”を意識しての入会が8

表1 サンプルの属性

| | | n | % | | | n | % | |
|-----------|-----------|----|------------|----------|-------------|-----|------|------|
| 年 齢 | 10歳代 | 14 | 12.3 | 入会目的 | 健康・体力づくり | 62 | 57.9 | |
| | 20歳代 | 17 | 14.9 | | 楽しみ・気晴らし | 7 | 6.5 | |
| | 30歳代 | 12 | 10.5 | | 運動不足の解消 | 28 | 26.3 | |
| | 40歳代 | 16 | 14.0 | | 友人・仲間との交流 | 1 | 0.9 | |
| | 50歳代 | 19 | 16.7 | | 大会出場や競技力向上 | 3 | 2.8 | |
| | 60歳代 | 21 | 18.4 | | 美容や肥満解消 | 4 | 3.7 | |
| | 70歳代 | 15 | 13.2 | | その他 | 2 | 1.9 | |
| | N.A. | 1 | | | N.A. | 8 | | |
| 性 別 | 男性 | 36 | 31.3 | 会員期間 | 6ヶ月未満 | 60 | 52.6 | |
| | 女性 | 79 | 68.7 | | 6ヶ月以上1年未満 | 28 | 24.6 | |
| | | | | | 1年以上 | 26 | 22.8 | |
| 婚姻状況 | 未婚 | 40 | 36.4 | | N.A. | 1 | | |
| | 既婚 | 70 | 63.6 | プログラム満足度 | 十分満足している | 54 | 48.6 | |
| | N.A. | 5 | | | まあ満足している | 55 | 49.5 | |
| | | | あまり満足していない | | 2 | 1.9 | | |
| 職 業 | 会社員 | 7 | 6.4 | | 満足していない | 0 | .0 | |
| | 団体職員 | 1 | 0.9 | | N.A. | 4 | | |
| | 公務員 | 1 | 0.9 | 継続意欲 | 参加したい | 96 | 83.5 | |
| | 自営業 | 1 | 0.9 | | まあ参加したい | 13 | 11.3 | |
| | 専業主婦 | 43 | 39.1 | | わからない | 5 | 4.3 | |
| | 大学生 | 30 | 27.3 | | あまり参加したくない | 1 | 0.9 | |
| | パート・アルバイト | 20 | 18.2 | | 参加したくない | 0 | .0 | |
| | 無職 | 3 | 2.7 | | | | | |
| | その他 | 4 | 3.6 | | | | | |
| | N.A. | 5 | | | | | | |
| 過去の運動経験 | ある | 61 | 53.0 | | 活動志向 (1位のみ) | 健康 | 77 | 74.7 |
| | ない | 54 | 47.0 | | | 楽しさ | 16 | 15.5 |
| | | | | 技術 | | 7 | 6.8 | |
| | | | | 交流 | | 3 | 0.3 | |
| 施設までの所要時間 | 10分圏内 | 45 | 39.1 | | N.A. | 12 | | |
| | 20分圏内 | 41 | 35.7 | | | | | |
| | 30分圏内 | 15 | 13.0 | | | | | |
| | 30分以上 | 14 | 12.2 | | | | | |

N=115

割弱を占め、総合型クラブの趣旨の一つである“交流”については1%をも下回る結果となった。そしてクラブ会員の約半数が、会員期間6ヶ月未満であった。またクラブ施設への所要時間は20分圏内が約75%を占めていたことから、自転車等で無理なく日常的に集うことができる“中学校区”，すなわち総合型クラブが唱える“地域住民”であるといえる。

プログラムの満足度については98.1%の会員が満足していた。また継続意欲においても「参加したい」が8割を超え、「まあ参加したい」と合わせると実に95%の会員が今後もクラブでの活動を望んでいることが明らかとなった。また活動志向については「健康(74.7%)」を重視する会員が最も多く、次いで「楽しさ(15.5%)」,「技術(6.8%)」,「交

流（3.0%）」であり、入会目的を反映する結果となった。

過去に運動経験がないクラブ会員が約半数もいた。このことは地域に新しいクラブが設立されたことにより、運動・スポーツを始めるきっかけとなった会員であるといえよう。

2) クラブ満足度

クラブの満足度については、その満足度が高かった順に「スタッフ（指導者や担当者）の対応（4.69）」、「プログラムの指導内容（4.63）」、「施設・設備（4.55）」といった大学ならではの資源に対する評価が高かった（表2参照）。一方で、プログラムに関する項目「広報活動（3.58）・種目数（3.66）・時間帯（3.87）・頻度（3.94）」の評価に低い傾向が表れた結果となった。このことは他の総合型クラブが抱える課題の一つである“活動場所（施設）がない”ことはクリアされてはいるものの、プログラムの時間帯や頻度はその利用施設が大学の施設であることから、授業優先のために空いている時間帯でないとプログラムが実施できないことなどがその原因としてあげられ、現状では必ずしも会員の要望に応えられていないといえよう。加えて、「会員との交流（3.83）」についても満足度が低かった。

また本サンプルの会員特性（学生、専業主婦、それ以外）の特徴をみるために、クラブ満足度の項目ごとにF検定を行った。その結果、「クラブ運営全体の満足度」のみ有意な差が認められ、学生の満足度が専業主婦やそれ以外の他の者よりも高いことが明らかとなった。

表2 クラブ満足度

| | 平均値 | F値 |
|--------------------|------|-------|
| 1 スタッフ（指導者や担当者）の対応 | 4.69 | .82 |
| 2 プログラムの実施回数（頻度） | 3.94 | 1.12 |
| 3 プログラムの時間帯 | 3.87 | 1.20 |
| 4 プログラムの多さ（種目数） | 3.66 | 2.42 |
| 5 会場までの利便性（行きやすさ） | 4.07 | .22 |
| 6 会場の施設・設備 | 4.55 | .56 |
| 7 プログラムの指導内容 | 4.63 | 1.15 |
| 8 プログラムの運動効果 | 4.43 | .63 |
| 9 会員との交流 | 3.83 | 1.36 |
| 10 プログラムに関する広報活動 | 3.58 | .79 |
| 11 クラブ運営全体の満足度 | 4.03 | 3.54* |
| クラブ満足度全体（平均） | 4.13 | .58 |

* p<.05

3) 活動成果

クラブへの加入により、その成果があがった上位3項目は「ストレス解消や気晴らしができた (4.18)」、 「運動時間が増えた (4.13)」、 「生活が楽しくなった (3.97)」であったことから、運動・スポーツ自体の効果よりもそれを介した成果が向上していることが明らかとなった(表3参照)。また「地域の活動に参加するようになった (2.79)」、 「地域への関心が高まった (2.97)」といった“地域に関する項目”においては、その成果がみられなかった。このことから、本クラブの会員は個人的な成果はあげていたものの、他の会員との交流に満足していない会員が多かったことから、“地域”に根ざすことがその設置目的の一つである総合型クラブとして、現時点ではその役割が果たせていないといえ、本クラブの課題としてあげられたといえよう。

また会員特性(学生, 専業主婦, それ以外)の特徴をみるために成果項目ごとにF検定を行った結果、ほとんどの項目において「学生」が「専業主婦」, 「それ以外」よりも有意に成果が上がっていた。また専業主婦では「家族との会話が増えた」という項目についてのみ、成果としてあげていることが明らかとなった。特に地域に関する項目については「学生」と「それ以外」との間に差がみられ、学生はクラブを通して“地域”というものに関心を持って活動という行動に移っていたが、「それ以外」については総合型クラブという

表3 活動成果

| | 平均値 | F値 |
|-----------------------|------|---------|
| 1 生活が楽しくなった | 3.97 | 2.91 |
| 2 技能や記録が向上した | 3.31 | 4.04* |
| 3 人との交流が深まった | 3.70 | 5.76** |
| 4 運動時間が増えた | 4.13 | 2.57 |
| 5 ストレス解消や気晴らしができた | 4.18 | 5.21** |
| 6 スポーツへの関心が高まった | 3.84 | 8.77*** |
| 7 新しい仲間や友だちができた | 3.59 | 5.60** |
| 8 地域への関心が高まった | 2.97 | 2.45 |
| 9 地域の活動に参加するようになった | 2.79 | 3.65* |
| 10 家族との会話が増えた | 3.07 | 3.38** |
| 11 スポーツ活動がしやすくなった | 3.53 | 5.12** |
| 12 運動する場所の確保がしやすくなった | 3.59 | 8.82*** |
| 13 教室やイベントに参加する機会が増えた | 3.14 | 2.18 |
| 14 多くのスポーツを行うようになった | 3.05 | 2.97 |
| 15 スポーツがより楽しくなった | 3.75 | 3.85* |
| 活動成果全体 (平均) | 3.55 | 7.39** |

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

観点からではなく、スポーツクラブ内での活動という意識に限定されていることがうかがえる。

4) 組織コミットメント

組織コミットメントの測定において、特に尺度の信頼係数が著しく低い場合には、否定的な態度を示す6項目を除外するショート・バージョンが用いられるケースもあるが（Mowday et al., 1982；Cuskelly et al., 1998），本研究で用いた15項目からなるOCQの信頼係数は0.811となっており，15項目の平均得点を組織コミットメントとして扱うことは妥当と判断できた。

そのOCQ（15項目）の平均値は表4に示しているとおりでである。いずれの項目も得点が高いほど組織に対する肯定的な態度を表しており，コミットメントが強いと解釈することができる。なお，本研究におけるOCQ全15項目の平均値は3.86であり，会員のクラブに対するコミットメントは相対的に低くはないことが明らかとなった。

それぞれの項目の平均値をみると，最も高い値を示したのは「このクラブをやめようと考えている（4.49）」（逆転項目）という，クラブに留まっていたい意志を表す項目であった。次いで「クラブの会員になったことは明らかに誤りである（4.48）」（逆転項目），「ク

表4 組織コミットメント

| | Mean | S.D. | F 値 |
|---------------------------------|------|------|---------|
| 1 クラブのメンバーになろうと決めたことを嬉しく思う | 4.14 | .71 | 1.81 |
| 2 クラブは自分のしたい活動をするために最適である | 4.11 | .74 | 3.24* |
| 3 クラブのメンバーであることを他人へ話すことに誇りを感じる | 3.75 | .82 | 1.00 |
| 4 友人にクラブのすばらしさを興味を持つように話す | 3.83 | .78 | 2.45 |
| 5 このクラブの将来が気になる | 3.55 | .88 | 8.69*** |
| 6 自分とこのクラブの価値観がよく似ている | 3.47 | .78 | .67 |
| 7 このクラブは自分の持つ能力を十分引き出してくれる | 3.59 | .81 | 6.02** |
| 8 クラブの活動を継続するためにはどんな役割でも引き受ける | 3.06 | .84 | 4.12* |
| 9 クラブの活動がうまくいくように周囲の期待以上に貢献している | 2.93 | .90 | 7.11*** |
| 10 クラブの会員になったことは明らかに誤りである (-) | 4.48 | 1.02 | 5.35** |
| 11 クラブの方針にしばしば同意できないことがある (-) | 4.10 | 1.05 | 2.17 |
| 12 このクラブより他のクラブの方が活躍できる (-) | 4.02 | 1.12 | 5.70** |
| 13 このクラブに尽くしても得られるものがあまりない (-) | 4.12 | 1.04 | 1.93 |
| 14 このクラブへの愛着心はほとんどない (-) | 4.10 | 1.04 | 2.00 |
| 15 このクラブをやめようと考えている (-) | 4.49 | .92 | 1.92 |
| OCQ全体（平均） | 3.86 | .49 | .68 |

Cronbach's $\alpha = 0.811$ note：点数は1-5 (-) は逆転項目

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

ラブのメンバーになろうと決めたことを嬉しく思う (4.14)」という結果であった。このことから、クラブへの入会に対しては肯定的な評価が得られているといえる。

一方、「クラブの活動がうまくいくように周囲の期待以上に貢献している (2.93)」、「クラブの活動を継続するためにはどんな役割でも引き受ける (3.06)」というクラブ活動への関与を表す2項目が下位項目となり、他の項目と比較して相対的に低い値を示した。つまり、クラブとしての活動に対して自ら積極的に関わろうとする態度が弱いということである。加えて、「このクラブの将来が気になる (3.55)」という項目が示す値もそう高くないことから、本クラブの会員はクラブへの帰属意識はあるものの、クラブの発展や存続についてはあまり意識していないことがうかがえる。

さらに会員特性（学生、専業主婦、それ以外）においてその特徴をみるためにOCQの項目ごとにF検定を行った結果、学生は「自分のしたい活動をするために最適である」、「友人にクラブのすばらしさを話す」、「クラブの将来が気になる」、「自分のもつ能力を引き出してくれる」、「クラブの継続のためには役割を引き受ける」、「クラブの活動がうまくいくように貢献している」といった項目で有意な差が認められた。このことから、学生はやりたいことができる最適なクラブであると位置づけているだけでなく、クラブの維持や発展のことも考え、そのためには一役買おうとする意志が見受けられる。一方、専業主婦とそれ以外では「クラブの会員になったことは誤りである」（逆転項目）、「他のクラブの方が活躍できる」（逆転項目）の項目で有意差が認められたため、このクラブでよしとする“保守的”な考えであると捉えることができる。

また上述したOCQ (15項目) の平均値が高い項目および低い項目、ならびに会員特性における特徴においては、松本・北村 (2004) が研究対象とした大学を拠点としない総合型クラブの会員と同傾向を示す結果であった。このことについては、本研究で使用しているマウディらのOCQがスポーツ組織独自の構成要素を検討したものではなく、測定スケールの性格上、情緒的要素を重視した組織コミットメントの測定となっている可能性が高いことを行實 (2009) が指摘していることから、大学を拠点としているか否かという組織が影響を与えているというよりは、総合型クラブという特質によるものであると捉えることができよう。

5) 組織コミットメントと継続意欲を規定する要因

組織コミットメント（クラブへの関わり）とクラブへの継続意欲を規定する要因を明らかにするために、個人的属性（4項目）、クラブ活動状況（2項目）、クラブ活動志向（4項目）の計10項目を説明変数とし、OCQ（15項目）ならびに継続意欲を被説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を施した。その結果、組織コミットメントを規定する要因は「クラブ満足度」であり、クラブへの継続意欲を規定する要因は「組織コミットメント」であった（表5、表6参照）。このことから、実にシンプルではあるが、クラブの発展に繋がる会員の継続意欲を高めるためには、まずは現在のクラブ活動をいかに満足してもらえるかがポイントであるといえよう。また本研究では、組織コミットメントならびにクラブへの継続意欲を規定する要因は1つずつしか抽出されなかったのに対し、大学を拠点としない総合型クラブの場合では、それぞれ複数の要因が抽出されていた（松本・北村, 2004）。この差異は会員特性が異なっているだけではなく、大学を拠点としたクラブへの満足度の高さ、つまり「大学ならではの資源」に対する評価が強い影響力を与えているものと考えられる。

表5 組織コミットメントを規定する要因

| モデル1 | 標準化係数 (β) | t | | |
|--------|-------------------|------|-----------------------------------|-----|
| クラブ満足度 | .545 | 4.36 | R=0.545 R ² 乗=0.297 | *** |

*** p<.001

表6 継続意欲を規定する要因

| モデル1 | 標準化係数 (β) | t | | |
|-----------|-------------------|------|-----------------------------------|----|
| 組織コミットメント | .325 | 3.07 | R=0.325 R ² 乗=0.105 | ** |

** p<.01

6) クラブ選定項目

クラブを選定する項目を22項目設定し、選定する際の重要度（期待度）を“非常に重要である”から“まったく重要でない”までの4段階評価尺度にしてたずねた。回答にはそれぞれ4から1の得点を与えて数量化し、これらの変量を総合的に取扱い、かつまとめたものに順位付けをするために主成分分析を施した結果が表7である。

固有値が1.0以上の4因子を、クラブを選定する際に重要視する因子として抽出した。この4因子による累積寄与率は60.3%で、分散の6割を説明することとなる。これらの因子とそれを構成する項目との関係を因子負荷量の大きさから検討、解釈し、各因子を次の

ように命名した。第1因子は、健康相談、メディカルチェックや健康検査、体力測定と評価、運動相談など、スポーツ整形外科医・スポーツ内科医の協力体制やその設備が整っている本クラブが特長としてあげている項目が高い因子負荷量を示しているため、その環境が整っている、あるいは整えやすいとすることがポイントとなることから「大学連携」と命名した。第2因子では、大会への出場やイベントへの参加に技術の獲得・向上、またクラブ会員同士や地域との交流を表す項目で構成されていることから「技術・交流」とした。同様に、第3因子は「健康・楽しみ」、第4因子は「プログラム」と命名した。これらの因子の安定性を検証するため、信頼係数 α を算出した。その結果、今回抽出された因子はいずれも0.6以上の値を示しており、比較的安定した因子であると解釈できる。

以上のことから、クラブを選定する際には、大学を拠点あるいは大学と連携することで可能となる要因が最も重要視されていることが明らかとなった。

7) 本クラブの特長と課題

本クラブの特長やクラブ運営の課題抽出を試みるため、クラブ選定項目ごとに満足度（“満足”から“不満足”までの4段階評定順にそれぞれ4から1の得点を与えて数量化した）の平均値から重要度の平均値の差を算出した（表7参照）。その結果、「技術・交流」因子が0.71ポイントと最も大きく、次いで「大学連携」因子となっており、この2つの要因は会員が思っていた以上にその効果や価値を認めていることがうかがえる。また「健康・楽しみ」因子のポイントがそう大きくないのは、最初から重要（期待）度が大きく、かつその期待に応えられていることがその一因であると考えられる。

さらにクラブ選定項目ごとにみた場合、マイナスポイント（重要度の平均値より満足度の平均値が低かった場合）となったのは「健康・体力づくり」と「プログラムの時間帯」であった。特にプログラムの時間帯は、本研究における他の分析結果においても不満であることが明らかにされており、会員のリクエストに応えられていないことが反映された結果であったことから、本クラブの課題となった。

表7 クラブ選定項目

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | α | 満足度-重要度 |
|----------------|------|------|-------|-------|-------|-------|----------|---------|
| 健康相談 | .906 | .121 | | | | | | |
| メディカルチェックや健康検査 | .874 | .146 | | | -.132 | | | |
| 体力測定と評価 | .837 | .183 | | .142 | -.117 | | | |
| 運動相談 | .833 | .339 | | | | -.116 | .897 | 0.65 |
| 最先端の情報 | .627 | | | | .266 | .458 | | |
| 指導者の質 | .621 | .180 | .317 | | | .174 | | |
| 大学との連携 | .616 | .244 | | | .432 | .291 | | |
| 大会への出場 | .150 | .741 | -.260 | -.103 | | .114 | | |
| クラブ主催のスポーツイベント | .380 | .699 | -.112 | .193 | .129 | -.218 | | |
| 技術の獲得・向上 | .332 | .697 | .257 | -.199 | | .188 | .846 | 0.71 |
| 学生との交流 | .287 | .692 | | | -.166 | | | |
| クラブ会員同士の交流の場 | .370 | .642 | .165 | .296 | .132 | -.177 | | |
| 友人・仲間・地域との交流 | .264 | .613 | .418 | | .145 | | | |
| 運動不足の解消 | .255 | | .801 | .206 | | .110 | | |
| 楽しみ・気晴らし | | .168 | .800 | | .244 | -.141 | .753 | 0.39 |
| 健康・体力づくり | .444 | | .612 | | -.151 | .395 | | |
| 通いやすさ | | | .239 | .810 | -.260 | | | |
| プログラムの時間帯 | .329 | | | .753 | .221 | -.108 | .746 | 0.13 |
| 利用料金 | | | | .642 | | .497 | | |
| プログラムの豊富さ | .403 | .229 | .132 | .625 | .264 | -.159 | | |
| 託児所の有無 | | .105 | .132 | | .855 | | | |
| 施設や設備の充実 | .352 | .302 | .345 | | | .587 | | |
| 寄与率 | 24.4 | 14.8 | 10.6 | 10.5 | 6.3 | 5.9 | | |
| 累積寄与率 | 24.4 | 39.2 | 49.8 | 60.3 | 66.6 | 72.5 | | |

因子抽出法：主成分分析：Kaiser の正規化を伴うクォーティマックス法

4. 結語

本研究では大学を拠点とした総合型クラブに着目し、会員の特性やクラブへのコミットメント、クラブの選定要因について明らかにすることにより、今後のクラブ運営における基礎資料を得ることを目的に分析を進めてきた結果、以下の結論を導き出した。

- 1) 本クラブの会員特性については、男性は大学生を中心とした若年層で楽しさ志向、女性は専業主婦を中心とした中高年者で健康志向であった。また入会目的や活動志向から、8割弱の会員が「健康」を意識してクラブ活動を行っている。さらに会員の約半数が本クラブの設立がきっかけとなって運動・スポーツを始めていた。

- 2) クラブに対する満足度や活動成果、およびコミットメントにおいては相対的に高く、活動成果とクラブへのコミットメントにおいては、会員特性による違いが認められた。また満足度については、本クラブの特長でもある「大学ならではの資源」に対する評価が高かった。一方、プログラム関連項目への満足度が低く、特に「時間帯」への評価が厳しかった。
- 3) クラブに対する組織コミットメントを規定する要因は「クラブ満足度」であり、クラブへの継続意欲を規定する要因は「組織コミットメント」であった。このことは、クラブに対する満足度が高いほどクラブへの関わりが強く、クラブへの関わりが強いほどクラブに対する継続意欲が高いことを説明するといえよう。
- 4) クラブを選定する際には、大学を拠点あるいは大学と連携することで可能となるプログラムや要因が最も重要視されていた。

以上のことから、本クラブの会員は学生と専業主婦、それ以外の3群に分類されるという特性をもっていた。また会員は本クラブへコミットメントしているほか、本クラブへの満足度や活動成果から概ねクラブに対して一定の評価をしている。加えて、クラブの発展に繋がる会員の継続意欲を強めるためには、何よりも現在のクラブ満足度を高めることが先決であることが判明した。そして、約半数の会員が本クラブの設立によってスポーツライフのスタートが切れたことについては、その貢献度は高いといえよう。しかしながら、学生以外の会員においてはクラブへの帰属意識はあるものの、クラブ自体の発展や地域への関心が低いことから、先行研究で指摘されていたように、本クラブの運営においても大学側の関与の度合いを検討する必要がある。特に総合型のキーワードである“地域の組織”や“自立・自律”を妨げているか否かの検証をしていくべきではないかと考えられる。

また大学を拠点とするクラブとしてのメリットに対する満足度は高かったものの、その認知度が低かったことから、『大学資源を有効活用した健康プログラムの広報活動』を行うことに加え、施設を有効活用して会員の要望に応じた『プログラムの時間設定』、そして『会員同士の交流を深める仕組みをつくる』の3点が、本クラブの運営における今後の課題としてあげられた。しかしながら、本研究はケーススタディであることから、大学を拠点とした総合型クラブとしての特徴を明確にするには限界がある。したがって、今後は大学を拠点とする総合型クラブを対象とするだけでなく、大学を拠点としない総合型クラブと比較検討する実証的研究を蓄積していくことも喫緊の課題であるといえよう。

文 献

- 馬場宏輝・丸山富雄・仲野隆士・永田秀隆・中房敏朗・粟木一博・柳久恒・石丸出穂（2008）大学を核とした総合型地域スポーツクラブの創設・育成・運営の可能性について－仙南広域スポーツ研究会の活動報告から－. 仙台大学紀要40（1）：pp.111-123.
- Cuskelly, G., McIntyre, N. and Boag, A. (1998) A longitudinal study of the development of organizational commitment amongst volunteer sport administrators. *Journal of sport management* 12（3）：pp.181-202.
- 遠藤大哉（2000）総合型地域スポーツクラブへの所沢市民の期待に関する報告. 早稲田大学人間科学研究13（1）：pp.113-125.
- 原田尚幸・大橋さつき・矢田秀昭・井出健二郎・山崎秀雄（2007）総合型地域スポーツクラブのプログラム開発. 和光大学総合文化研究所年報『東西南北』：pp.322-328.
- 伊藤克広・山口泰雄（2001）総合型地域スポーツクラブの形成過程とマネジメント課題－「加古川スポーツクラブ」のケーススタディ－. 神戸大学発達科学部研究紀要 8（2）：pp.109-121.
- 黒須充・水上博司（編著）（2003）「ジグソーパズルで考える総合型地域スポーツクラブ」NPO法人クラブネッツ（監修），大修館書店.
- 松本耕二・北村尚浩（2004）総合型地域スポーツクラブ会員の組織コミットメント－県内NPO法人Yスポーツクラブの事例報告－. 山口県体育学会第49回大会資料
- 松永敬子（2003）拠点施設としての総合型地域スポーツクラブの役割－クラブハウス確保とその経緯に注目して－. 大阪体育大学紀要34：pp.95-106.
- 松永敬子（2005）総合型地域スポーツクラブの認知と公共性を高めるための経営課題－会員と非会員の比較検討から導き出したクラブ発展の鍵－. 大阪体育大学紀要36：pp.111-120.
- 文部科学省（2009）大学と総合型地域スポーツクラブの連携等について. 文部科学省生涯スポーツ課資料
- 文部科学省（2010）平成22年度総合型地域スポーツクラブ育成状況調査
- Mowday, R.T., Poter, L.W. and Steers, R.M. (1982) *Employee-Organization Linkages: The psychology of commitment, absenteeism, and turnover*. Academic Press: New York.
- 永谷稔・築瀬歩・梅垣明美（2005）大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブ化への模索について. 北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要43：pp.43-52.
- 永谷稔・築瀬歩（2006）大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブの設立についての研究－調査結果とクラブアドバイザーの視点から－. 北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要44：pp.13-21.
- 永谷稔・上田知行（2007）北方圏における総合型地域スポーツクラブ設立へ向けた住民調査－本

- 学周辺住民調査結果から－. 浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要7 : pp.79-87.
- 永谷稔 (2010) 北方圏における総合型地域スポーツクラブ設立の周辺住民追跡調査結果. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要1 : pp.17-25.
- 中村好男 (2001) 総合型地域スポーツクラブを通じた大学と地域との連携. 日本体育学会第52回大会号 : p.38.
- 堺賢治・藤原誠・井上誠治・日野克博 (2006) 大学における総合型地域スポーツクラブづくり－E大学の場合－. 日本体育学会第57回大会 体育社会学専門分科会発表論文集 : pp.65-69.
- 総合型地域スポーツクラブに関する有識者会議 (2009) 今後の総合型地域スポーツクラブ振興の在り方について－7つの提言－.
- 高橋仁美・来田宣幸・坂井智明・竹田正樹 (2009) 地域と大学が連携した総合型地域スポーツクラブとしてのチャリーディング教室の取り組み. *Doshisha Journal of Health & Sports Science* 1 : pp.79-91.
- 竹田正樹 (2009) 「京たなべ・同志社スポーツクラブ」を例とした大学と地域連携による地域総合型スポーツクラブの提案. *Doshisha Journal of Health & Sports Science* 1 : pp.61-70.
- 富山浩三 (2003) 総合型地域スポーツクラブ評価－会員のクラブへの帰属意識の視点から－. 日本体育学会第54回大会号 : p.413.
- 梅垣明美・永谷稔 (2005) 総合型地域スポーツクラブのあり方に関する研究－公共圏の創出をめざして－. 北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要43 : pp.31-41.
- 行實鉄平・満園良一 (2007) 大学における総合型地域スポーツクラブ育成に関する研究－大学と行政の組織間関係論の検討－. 久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要14(1) : pp.53-60.
- 行實鉄平 (2009) 大学と総合型地域スポーツクラブの連携に関する研究－K大学生の組織コミットメントに着目して－. 久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要16(1) : pp.25-36.
- 行實鉄平 (2009) 総合型地域スポーツクラブ会員のスポーツライフと地域・コミットメントとの関係性－保護者を対象にした実証的検討－. 久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要17(1) : pp.15-25.